

我が家の家系図と源氏物語

苫小牧市医師会
苫小牧東病院

菊地 芳彦

私の家には平安時代の第60代醍醐天皇（在位897年～930年）の第14皇子成明（なりあきら）、第62代村上天皇（在位946年～967年）の第4皇子である為平親王（952年～1010年）を始まりとして現代に至るまでの1100年間余に及ぶ家系図があります。家系図は桐の箱に納められて金と緑の和紙の表装で幅25cm、長さ4m70cm程度の物です。私の父親は長男ではないので、なぜ父親まで伝わって来たのかは不明です。

実は数年前に私の所属するロータリークラブで卓話の機会があり、この家系図に関してインターネットでごく簡単に調べたことがありました。当時、第62代村上天皇は源氏物語の作者である紫式部と同時代人であったとの認識しか得ることができませんでした。しかし今回の原稿依頼でもっと詳しく調べてみようと思い立ち、兄が受け継いでいる家系図を次男の私が譲り受けました。私の息子は東京の私立大学精神神経科学教室に在籍していますが、豊臣家の御典医をルーツとする500年余りに渡る医師の家系でやはり精神科医である妻との間に、昨年夏に男子の孫も生まれたこともあり、息子にはこの由緒ある家系図を今後永久保存するように厳命した処です。私は本業の傍ら、専らインターネットでさらに詳しく調べてみました。すると以下の2つの重要な発見がありました。

まず一つ目は、第62代村上天皇の第4皇子である私のルーツ為平親王は、今上天皇の直系であることです。為平親王から今上天皇に至る系譜には10数通りの系譜がありますが、いずれも現在の天皇に直結しているようです。さてもう一つの発見は、源氏物語「桐壺」の巻の桐壺帝のモデルは、中間に朱雀天皇（在位930年～946年、醍醐天皇の第11皇子）を挟んでいますが、第60代醍醐天皇あるいは第62代村上天皇であることです。桐壺帝のモデルは醍醐天皇の方が強いようですが、いずれにしても私の家系上にあります。桐壺帝が醍醐天皇であると、その子は天皇である村上天皇になってしまいますので、源氏物語の人物設定上では村上天皇が桐壺帝、光源氏は当時の政争で村上天皇が後継者に押していた為平親王が天皇になれず臣籍降下させられましたが、村上天皇の配慮で、一品式部卿にまで昇進した歴史的事実から考えても、私のルーツ為平親王が光源氏のモデルであると確信しています。中宮藤原安子は村上天皇即位後従三位・女御ですが、源氏物語の人物設定からは桐壺帝は村上天皇であり、弘徽殿の女御

は中宮安子であり、桐壺帝が生涯愛した故大納言の娘である更衣桐壺を弘徽殿の女御が苛め抜くのです。桐壺帝と更衣桐壺からは玉のように美しい光源氏が誕生しますが、更衣桐壺は病弱で23歳で夭折してしまいました。源氏物語に物の哀れ、夢幻という暗いテーマをもたらしています。光源氏は恋多き男性でしたが、桐壺帝の更衣桐壺亡き後に入内した中宮藤壺という義母と道ならぬ関係を持ってしまいました。彼女が光源氏の運命の女性で、彼は彼女の幻影を求めて恋の遍歴をして行くのです。

ところでこの藤壺のモデルとされているのは村上天皇の中宮安子の実妹である尚侍登子、従妹である女御芳子であるというのは皮肉な因縁です。光源氏は若くして相当の大富豪で大將になり、21歳で数千万円の年収があり、晩年の39歳では上皇相当の身分で4億円近い年収がありました。しかも当時は男性が妻の家に通う通い婚で、妻の実家がお婿さんの生活の面倒を見ることになっていました。光源氏は多くの女性たちと恋の遍歴をしましたが、一度でも愛した女性は彼女が死ぬまで面倒を見ました。実は平安時代の女性たちは仏教思想の影響で食べ物のタブーが多く、食べることを軽視し、ほとんど栄養失調、肺結核等で顔も体も浮腫んだ状態で、平安貴族の女性の平均寿命は27歳位だったからこそできたことだったのででしょうか。

源氏物語に記載されている当時の病気としては、①わらわやみ：多くはマラリヤ、②しはぶきやみ：気管支炎や感冒、③風病（ふびょう）：風邪のほか、中風などの神経系疾患、④脚病（かくびょう）：かっけ（脚気）、⑤腹の病：腸炎・下痢・便秘等、⑥胸の病：胸部全般にわたる種々の病気、または結核性疾患、⑦歯の病：年老いて歯の抜けた状態、⑧目の病：ヒステリー性失明症。源氏物語の作者・紫式部の生年と没年は確定していませんが、与謝野晶子説では生年が978年、没年が1016年です。藤原道長が紫式部に源氏物語の執筆を支援し、彼は紫式部の源氏物語の一番の愛読者であり、各帖の原稿が完成していない状態なのに、著者に断りなく持ち出して読んでいたようです。ところでこの長編小説には婦人語がない、出産の説明が現実的でない、食べ物の話が全くない等、女性が書いたにはおかしい、男性が書いた物である、数人の合作であるという説もあります。

さて、私の家系図のルーツ為平親王の男子には源憲定、源頼定、源為定、源顕定、源教定、源敦定がありますが、顕定（あきさだ）について「今昔物語」には御所の公家の会議で「弾正の弼源顕定、摩羅を出だして笑はるゝ事」という逸話が記載されています。実は私のルーツはこの顕定方であることも今回判明しました。

私は今後もこの家系図に記載されている多くの人物を更に調査してみたいと考えています。